

溶連菌感染症

溶連菌（A群β溶血性連鎖球菌）という細菌の感染で起こる病気です。溶連菌が患者さんのせきやくしゃみで飛び散り、それを吸い込んで感染します。寒い季節から春先に流行する風邪の一種で、何回もかかることがあります。潜伏期は2～5日で主に2～10歳の子供がかかりやすく、成人には少ないといわれていますが、家庭内感染がよく見られます。また、いろいろな合併症を引き起こすためしっかりと治療することが必要です。

症状

急に発熱（38～39℃）し、のどの痛み、首のリンパ節が腫れるなどの症状がでます。口の中を見るとのどが真っ赤に腫れ、舌の表面がイチゴのようにぶつぶつとしています。また、赤く細かい発疹が手足や体にでます。ときには、目が赤くなったり口元がただれたりします。いろいろな症状が落ち着いた後に、手や足の皮が指先からむけることもあります。これは自然に治ります。

診断

綿棒でのどの細菌を採取し、検査をすれば30分ほどで診断がつきます。

治療

溶連菌感染そのものは、抗生物質を2～3日飲めば症状は消えます。

しかし合併症を防ぐためには最低10日間は薬を飲み続けます。

合併症を調べるために2～3週間後に尿検査をします。

合併症

- 腎盂腎炎
溶連菌感染症の2～4週間後に発症します。急に真っ赤な尿が出て顔や足がむくみます。また、尿の量が減ったり、血圧が上昇し頭が痛くなったりすることがあります。入院が必要なこともあり、その後も何年かは定期的な診察・検査が必要になります。軽い場合、尿の色調は正常でも検査で潜血が出ることもあります。
- リウマチ熱
溶連菌感染症の後に発症しますが、時期は特に決まっていません。高い熱が何日も続き、手足の関節が腫れて痛んだり赤い発疹が出たりします。症状が重いと心臓の中で血液の逆流を防いでいる弁に障害（心臓弁膜症）を残すことがあります。

ホームケア

抗生物質を内服して、適切に治療をすれば24時間以内に他人への感染力はなくなります。

のどの痛みや発熱で食欲がないときは、水分を中心に口当たりの良いものを摂りましょう。

全身状態がよければ、登校登園は可能です。

兄弟や両親に同じような症状があれば、病院を受診しましょう。

お薬を勝手にやめないようにしましょう。

しばらくは尿の色に気をつけましょう。

